印度學佛教學研究第六十七巻第一号　平成三〇年十二月

非択滅の一考察

倉松崇忠

一　緒言

非択滅は、五位七十五法において虚空、択滅とともに無為法を構成する法である。そして、非択滅は、先行して登場した択滅という法の範疇に入らない事象を示すものとされる。(1) 択滅とは、四諦を対象とする智慧（択力）によって得られる有漏法からの離繋とされ、涅槃の異名とされる。それに対して、非択滅は、『倶舎論』では、択力に拠らない滅であり、未来の法が生起する縁を欠くことにより、永遠に未来に留まってしまうことを指すとされる。

非択滅の事例として、『倶舎論』は

如下眼與レ意專二一色一時上、餘色聲香味觸等謝、縁二彼境界一五識身等、住二未來世一畢竟不レ生。由二彼不一レ能レ縁二過去境一。縁不レ具故得二非擇滅一。　（大正二九、一下―二上、傍線は筆者による）

という例を挙げる。中国と日本の倶舎学では、この文の眼と意が具体的に何を指すのかが一つの論点となっている。本稿では、この問題について、中国と日本における『倶舎論』の注釈書においてどのような解釈が行われているのかについて考察を行いたい。

二　中国における解釈

初めに、中国における解釈を確認したい。中国の注釈書において、この問題について解釈している記述が確認できるのは、普光著『倶舎論記』と法宝著『倶舎論疏』の二つである。以下では、『倶舎論記』、『倶舎論疏』の順に考察を行う。

①普光著『倶舎論記』

まず、『倶舎論記』の解釈を確認する。

如下眼與レ意識前後相續專二一色一時上、言レ眼已攝二眼識一。以二見レ色時必有一レ識故。或言レ意者、所謂眼識。十二處中亦名レ意故。或言レ意者、所謂意處。以二七心界皆名一レ意故。（大正四一、一三中）

この記述によれば、普光は三つの解釈を提示している。

第一の解釈は、眼を眼根と眼識とし、意を意識と解釈するものである。ここで眼に眼識を加えた理由を、普光は色を見る時には必ず識があるからである、とする。

第二の解釈は、眼を眼根、意を眼識と解釈するものである。ここで、意を眼識と解釈できる理由を、普光は十二処の分類では眼識は意に分類されるからである、としている。

第三の解釈は、眼を眼根、意を意処（七心界）とする説である。

②法宝著『倶舎論疏』

次に、『倶舎論疏』の記述を確認する。

如眼與意專一色時者、眼謂眼根、意謂意識。即是有二一分意識一取レ色之時、餘識等法得二非擇滅一。或即眼識。以二意名一説。或專二一青等色一時、同時黄等色及四境念念滅者、能緣二彼境一五識等法、住二未來世一畢竟不レ生。以二彼不一レ能レ緣過去故。亦不三更能緣二餘境一故。正理論云、如下眼與レ意專二一色一時上、於二所餘色・及一切聲・香・味・觸等念念滅中一、緣レ彼少分意及法處、得二非擇滅一。以下五識身與二一分意識身等一、於二已滅境一終不上レ能レ生。緣二倶境一故。述曰、一分意識者、如二八勝處等一。唯緣二現境一不レ緣二過去一。亦所緣定故、得二非擇滅一。意・及法處者、意是諸識、法處者、心所及四相等。（大正四一、四七三下―四七四上）

この記述によれば、法宝は二つの解釈を提示する。

第一の解釈は、眼を眼根、意を意識（一分の意識）と解釈するものである。ここで法宝は意識を一分の意識と限定している。一分の意識とは、八勝処のように、現在の境のみを対象とし、過去の境を対象としない意識を指すという。また、意を一分の意識と解釈する根拠を『順正理論』の記述としている。

第二の解釈は、眼を眼根、意を眼識と解釈をするもので、これは『倶舎論記』の第二の解釈と同一のものである。

三　日本における解釈

次に、日本における解釈を確認したい。日本の注釈書において、この問題について解釈している記述が確認できるのは、湛慧著『倶舎論指要鈔』、快道著『倶舎論法義』、普寂著『倶舎論要解』の三つである。以下では、『倶舎論指要鈔』、『倶舎論法義』、『倶舎論要解』の順に考察を行う。

①湛慧著『倶舎論指要鈔』

初めに『倶舎論指要鈔』の記述を確認する。

如眼與意至得非擇滅文。此依二婆沙三十二五紙右一意一。光釋二眼・意一有二三義別一。寶有二二釋一。泰疏不レ明。今謂寶疏第一爲レ正與光第一稍有不同。何者、眼爲二眼根一、意爲二意識一、不レ違二常例一。有二何所一レ妨用下意言二意處一或言中眼識上爲。又擇二擧意識一亦有二深致一。意識通緣二三

世一。五識唯局二現境一。欲四後明三五識得二非擇滅一故、今擧二意識一。彼六識中若約二五識一、不生之義分明易レ見。局二現境一故。若約二意識一、理或混淆。縁二三世一故。是以前擧二意識一、後約二五識一而言。又舊倶舎明言二意識及眼根一。不レ須二他求一。舊倶舎云。譬如下有レ人意識及眼根縁二一色塵一起上。是時餘色聲香味觸等悉有二即謝一。五識聚不レ能二縁レ彼爲レ境更生一。何以故、五識無レ有下功能縁二過去塵一爲上レ境。是故識等有二非擇滅文一　（大正六三、八二八中―下）

湛慧は、『倶舎論疏』の第一の解釈、つまり、眼を眼根、意を意識（一分の意識）とする解釈を正しい解釈であるとする。その根拠として、旧訳（真諦訳の『倶舎釈論』）において「意識及眼根」となっていることを挙げている。

また湛慧によれば、眼根に加えて、意識を加えたことには深い意味があるという。それは、五識が現在の境のみを対象とするのに対して、意識は三世の境を対象とするからである。よって、対象となるべき境が過去に去ったために不生となる、という非択滅を説明する場合、五識でまとめた方が分かり易くなる。その為『倶舎論』では、最初に意識を挙げて、その後に「五識が非択滅を得す」と述べているとする。

②快道著『倶舎論法義』

次に『倶舎論法義』の記述を確認する。

示レ事中、眼是眼根、眼識必具。意謂意識。舊論曰、意識及眼根。（中略）寶疏初釋爲レ是。後非也。光記三釋並非也。初釋同レ寶而不レ分レ意爲レ異。　（大正六四、三〇上）

快道は、眼を眼根と眼識、意を意識（一分の意識）と解釈する。その根拠としては、『倶舎論指要鈔』と同じく、旧訳の記述を挙げている。そして、この解釈は『倶舎論疏』の第一釈と同じであると述べている。しかし、現在確認できる『倶舎論疏』の第一釈の記述を見る限り、眼に眼識を加えるという記述は確認できない。また『倶舎論指要鈔』や『倶舎論要解』の記述を見ても、『倶舎論疏』の第一釈を、眼を眼根のみと解釈するという記述になっている。なぜ、快道が『倶舎論疏』の第一釈をこの様に解釈したのかについては、現在の所、確定できない。

また快道は、『倶舎論記』の第一釈と『倶舎論疏』の第一釈の違いを、意識を分割して解釈するかしないかである、としている。

③普寂著『倶舎論要解』

最後に『倶舎論要解』の記述を確認する。

諸解各有二一理一於レ中寶第一解應レ正。舊論文旨彰然可レ尋。　（仏全八九、三〇）

普寂も、『倶舎論疏』の第一釈が正しいとする。根拠も、これまでと同様に旧訳の記述を挙げている。

四　結語

最後に、まとめとして、中国と日本の注釈の傾向の違いについて述べたい。

一点目は中国の注釈では、幾つかの解釈を示すだけで、どの解釈が正しいのかを述べることがないのに対して、日本の注釈では、その中で一番正しい解釈を指定している（三書ともに『倶舎論疏』の第一釈を正しいとする）点である。

二点目が、旧訳の扱いである。『倶舎論記』で示される三釈には、旧訳の記述と同様の眼根と意識という解釈が存在しない。『倶舎論疏』の第一釈は、旧訳の記述と同様の解釈であるが、ここでは旧訳の記述について言及することはない。それに対して、日本の注釈書では、全て旧訳の記述に言及して、『倶舎論疏』の第一釈を正しい説である、としている。

この内、旧訳の扱いに関して、中国と日本の注釈書の旧訳の引用回数を比較すると以下のようになる。中国の注釈書では、『倶舎論記』が四回、『倶舎論疏』が二回引用する。一方の日本の注釈書は、『倶舎論指要鈔』が七十五回、『倶舎論法義』が六十六回、『倶舎論要解』が十回引用する。明らかに中国の注釈書の方が引用する回数が少ない。

普光と法宝は玄奘門下であるため、玄奘訳を重視する傾向があり、[2] その為に旧訳の引用回数が少なくなったと考えられる。一方の日本の注釈者たちは玄奘と国も時代も異なっているため玄奘の影響は普光などと比べ少なかったと考えられる。以上の事が、中国と日本の注釈書における旧訳引用数の違いを生み出したと考えられる。

1　小川宏［一九七九］七二一頁。

2　そのような傾向の例を挙げると、『倶舎論記』では一四五七回の引用の内、玄奘訳は総数の九割五分にあたる一三九八回引用される。

〈参考文献〉

小川宏「無為法に就て――特に非択滅思想の淵源とその発達――」『印度学仏教学研究』第二七巻第二号、一九七九

〈キーワード〉　非択滅、『倶舎論記』、『倶舎論疏』、『阿毘達磨倶舎論指要鈔』、『阿毘達磨倶舎論法義』、『阿毘達磨倶舎論要解』

（大正大学大学院）